『戦場にかける橋』泰緬鉄道に想う

タイへの派遣が決まり、タイについて何か知っておこうと観たのが、映画『戦場にかける橋』。1957 年に公開されアカデミー賞作品賞を受賞した。タイトルは知っているものの内容はまったく知らなかった。歴史的事実がもとになったこの映画を観て、第二次世界大戦がタイでどのように伝えられているか、知るべきであると思った。

そして、鉄道建設の犠牲になった人々に祈りを捧げたいと思った。

⇦①泰緬鉄道博物館　②アルヒル桟橋⇨

⇩③カンチャナブリ駅　④クウェー川鉄橋

（タイ・7 期）加藤　香須美

「タイの国鉄は、北、南、東、西に向かう鉄道があります。そして西に向かう鉄道は«死の鉄道»と呼ばれています。」これは、高校 2 年生が「話す」授業で、タイの公共交通機関を紹介したときの発表内容の一つである。西に向かう鉄道とは、トンブリ―からカンチャナブリを通り終点ナムトックまで行く旧泰緬鉄道のことだ。この鉄道は、第二次世界大戦中シンガポールを経由してビルマへ軍需物資を運ぶため日本軍によって建設された。最低 5 年はかかると言われていたがわずか 15 か月という短い期間で開通させたため、多くの犠牲者を出した。犠牲者となったのは、連合軍捕虜兵士約 1 万 6 千人、アジア（タイ、シンガポール、インド、マレーシア、ビルマ、インドネシア、中国）の強制労働者約 10 万人である。彼らは熱帯のジャングルでの過酷な労働のためマラリヤ、赤痢、コレラなどの疫病に罹患し亡くなった。連合軍捕虜の犠牲者はカンチャナブリの共同墓地（写真⑤）に埋葬されているが、タイ人を含むアジア人の労働者は今なお密林の中に眠っている。鉄道に乗車し、大地のすべてを見つめ、余すところなく祈りを捧げたいという想いでこの地を訪ねた。

⑤チョンカイ共同墓地

これらの史実を伝える施設がカンチャナブリにはいくつもある。捕虜の生活を伝える JEATH 戦争博物館(写真⑥)をはじめ、鉄道建設にかかわる資料を展示した泰緬鉄道博物館(写真①）、連合軍共同墓地などである。JEATH 戦争博物館は **J**apan, **E**ngland,**A**merica, **A**ustralia, **T**hailand, **H**olland の頭文字であるが、元は ***D***EATH であった。*DEATH* という言葉があまりに、残酷な印象を与えるとのことで D が J に替えられたとのことである。ここでは、“…If you work hard you will be treated well but if you do not work hard you will be punished”と書かれた Japanese Commander(写真⑦)が印象に残った。泰緬鉄道博物館（Thailand-Burma Railway Centre）は、計画や資材、設計図などのハード面に関わる資料の展示と考えていたが、建物に大きく「DEATH RAILWAY MUSEUM AND RESERCH CENTRE」と表示されている通り、戦時に行われた建設の苛酷な生活状況や医療に関すること、死に至る概要などを詳しく伝えており日本人としてそこにいることを悟られたくない気持ちになった。また、連合軍やチョンカイの共同墓地では整然と並べられた墓石に捕虜の名前や年齢、家族からのメッセージが刻まれ、20 代から 30 代前半の若い命が失われたことがわかる。メッセージは悲しみを誘い、二度とこのようなことが起きないようにと願わずにはいられない。

さらにヘルファイヤ・パス(写真⑧)にも訪れた。ビルマへ向かうジャングル内の岩場をつるはしや鍬で崩してレールを敷いた場所である。ここは特に工事のスピードを速めたところで、雨季と重なり病気が蔓延し多くの死者が出た。

高校 2 年生の口から«死の鉄道»という言葉が発せられるのは胸が痛く、心から世界の平和を願った。

⇧ ⑦⇨
⑥JEATH 戦争博物館

“…If you work hard you will be treated well but if you do not work hard you will be punished”

⇧⑧ヘルファイヤ・パス
（コンユウの切り通し）